
わたしとアイツの10の戦。

ぽち子。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしとアイツの10の戦。

【Nコード】

N6196N

【作者名】

ぼち子。

【あらすじ】

幼馴染が完璧な人間だった。

性格もよければ、普通に好きになったかもしれない。だけど、アイツにはただ一つ欠点があった。

「瑞希！今日も愛しているぞ！」

「病院行け！この変態！」

今日も幼馴染であるわたしへの愛を囁き密着し変態発言をする。

嘘か本当か分からないけど、幼馴染のアイツが変態なのは真実。

絆されるのが先か。

諦めるのが先か。

飽きるのが先か。

終わってみるまでは解らない。

変態という名の幼馴染のアイツとわたしの攻防戦。

前哨戦。

眉目秀麗。

文武両道。

才色兼備。

こんな奴が身近にいたら物凄く、嫌味だ。はっきり言って妬みの対象にしかない。

しかもそれが幼馴染ときたら、いちいち比べられてしまっただ。最悪だ。

これで性格がかゝりなゝりー良ければ、幼馴染であるわたし鈴原瑞希も間違いなく惚れていただろう。

しかし、こいつにはたった一つの欠点があった。…いや汚点とも言うべきか。

「マイラヴァー瑞希く！！！」

「くるな、変態！！！」

ヤツ、旗本聡里は幼馴染と言う名の変態だった。

「…待ち伏せストーカーは当たり前。

わたしが男子と話していると邪魔してくるし、おかげで恋の一つ二つも出来ない！！！」

「瑞希、恋するときは一つでしょ」

「なんか冷たくない!？」

ぺらぺらと雑誌の頁を捲りながらわたしの話は聞き流しのこの人は、わたしの親友…だと思う…間違いないければ。

キリッとした美人で少し冷たい印象を受ける人もいるかもしれないけど、わたしはそんな彼女、周防玲奈だから好きだ。

たとえ、その冷静な表情の下でわたしのことを見て愉しんでいても。

「…彼のどこが悪いの？ 頭もよくて顔も良くて将来は絶対安定よ？」

「だーかーらー!! あの変態のところが嫌なのよ!!」

この前なんか、わたしのいつ撮ったのか解らない隠し撮りを教科書に挟んでいるのを見たの!!」

「まあ、愛されてるのね」

「あー!!!! もうっ!!」

話に通じてない!!

そう、あいつは、外面だけはいいいから女の子にも男の子にも大人気。

むしろ私がいつも悪者扱い。私の言い分なんて誰も聞いてはいないのだ。

「…まあまあ、鈴原」

「榊くん!」

宥める様に割ってはいる声。

分かってくれるのは榊くんだけよ!!

なんで、あんな奴と親友なんかやってるのだろう。

まったくもって謎ね。

「辰巳、その子のそれはいつものことよ」

玲奈が雑誌から目を離さずにそう言った。

ちなみに、玲奈と榊辰巳くんは彼氏彼女としてお付き合いしている。

なんかタイプ違う感じなのに不思議かと思ってるのは私だけ？

「でも玲奈は聞いてないふりしてちゃんと聞いているよね」

「…何よ」

……前言撤回。

この玲奈さえ黙らせる底知れない笑みは怖い。

さすがはあの変態の親友をやっているだけはある。

玲奈なんてそっぽむいちゃったし。

「……たーつーみー」

はっ!?

この底から出したような恨めしそうなワザとらしい声は!

「ああ、聡里」

「俺のマイスイートハニーと何話してんだよ!!」

「誰がマイスイートハニーだ!!」

でた、変態!!!

生まれたときからお隣で幼馴染でいつも成績でも何でも私の上を

行く、イヤミ男!!

「いいんだ、ハニィ。そんなに照れなくても」

「照れてなんかない!!」

「僕と君が結ばれているなんて生まれる前から赤い糸で結ばれていたことさ!」

「だから人の話聞けー!!」

だれかこいつを病院に連れてってください。
心底、そう思う日々。

前哨戦。(後書き)

初投稿になります。

至らないところも多いですがよろしくお願いいたします。
そんなに変態にはならないと思います…おそらく…。

1戦目、結局大人にはなれませんでした。

「……ちょっと、何しているのよ」

「なにして？」

そんな見てるんじゃないわよ!!
やりにくいっいたらありゃしない

「いやー、瑞希何してるのかな? って思って」

「……見て分らないの?」

怒鳴りたい衝動を抑える。

今は自習の時間だ。

まだ多くのクラスメートが課題のプリントに励んでいるから騒い
ではだめ。

ここは百万歩譲って相手の言い分も聞こうじゃない。
そうしたらわたしは少し大人になれるかもしれない!

「分かるとも! 瑞希のことなら何でも分かるさ! たとえば今日の下
着の色はび……」

色を言いかけたところで、わたしは机ごとあの変態に投げつけた。
周りは「ああ、またか」と生暖かい目で見つめる。
だけどそんなことは構っていられない。

ちょっと待て。

「なんで、そんなことを知ってるのよ!!!!?」

ストーカーに覗きか、貴様は!!

ま、まさか……盗撮とかしてるんじゃない??

「瑞希の愛はいつも痛いな…いやそんな瑞希も愛してるが☆」
んなことは聞いてない！

首をぎりぎり絞めつける。

こいつが死のうがわたしには関係ない、むしろ逝ってしまえ！

「み、瑞希、さすがに殺人は不味いわ」

そういう周りによって止められたけど。

結構本気でシメたのに、この変態はへらりと笑っている。

その嬉しそうな顔、いらいらする！

ぎりぎりと睨みつけると、聡里はわたしの耳元に口を寄せた。

「瑞希…風が強い日は気をつけなきゃな」

ぼそっと耳打ちをされてようやく理解した。

まあ、見たのは俺だけだったけど。と奴はにんまり笑う。

今朝、玄関を出たとき突風が吹いていたのを思い出した。

誰も見ていないって思ったのに！

「瑞希、そんなのより早くやらないと」

冷静な玲奈の一言でようやく我に返る。

そうだ、とりあえずコレをやらないと。提出用のプリント。

「瑞希、ここ間違い」

聡里はプリントを指でとんとんと突付く。

見かえすと、確かに式が間違っている。

道理で答えが出ないわけだ…って。

「アンタ、自分の課題は？」

「そんなもの、ハニィとの時間のためなら瞬時に終わらせるとも」

つまり、自分は終わって暇だから。

ちよっかいをかけて暇を潰したいと。

その思考に至って、ぶちっと何かが切れる音がした。

「もう、構わないで！」

「それは無理。俺のこの溢れるばかりの愛を伝えたいからな」

さらに怒鳴ろうとしたわたしの口を聡里が制した。

そして時計を指差す。

「あと10分だけど終わるかな？瑞希ちゃん」

残るは一番難しい問題。

みんな答えに四苦八苦している。

実は課題が一問でも空欄だった場合は、次の授業の特別指名フルコース（簡単な問題から難しい問題まで全部指名される）が待っているのだ。

「うそ！」

「ほんとー、さて、ここにー解き終わった問題があります」

じっと、睨むと聡里はますます嬉しそうな顔をした。

うう、マゾなのかサドなのかはつきりしろ！

「今日から一週間登下校のエスコートちゃんとさせてくれたら……いいけど？」

結果、わたしは変態に屈した。

2戦目、強がりほどほどにしましょう。

「…なあ、辰巳」

「何、聡里」

「チアガールというのは破壊兵器並みの威力を持っていると思わないか？」

「うん。とりあえず、鼻血を拭きなよ」

「…うっわ、あの変態こっちみてる」

「そうね」

わたしの視線に気付いたのか、笑顔で手を振ってくる。

はつきり言ってキショクワルイ。

あの笑顔がすごくキモい。鳥肌ものだ。

「…瑞希、とりあえず応援するのが私達の役目だと思うけど」

うう…玲奈はあきれている…。

たしかにそうだけど…。

わたしは自分の格好を見下ろす。

膝上のプリーツのスカート、おへそがギリギリ見えないノースリーブのシャツ。

おまけに手にはオレンジ色の服に合わせて、オレンジ色のポンポン。

所謂、王道チアガール。

わたしだって、好きでチアガールなんかしてる訳じゃない！

「…わたしも試合出たかったのに」

「仕方がないじゃない。クラスで決めたことなんだから」
そう…。

今日の学年クラス別対抗球技大会にあらうことかあの変態バカは、わたしをチアガールに推薦した。

勿論、わたしは猛反対したのに。

「…ていうか、アレ脅しじゃん」

今思い出してもムカムカする！

アイツはわたしがチアをしなければ自分は試合に出ないと、しれつとぬかした。

このスポーツ万能男を抜いて優勝なんて出来るわけもなく…。

「みんな騙されてる！」

「はいはい。分かったから」

クラスメイトと、更に先生にまでに言われたらやらないわけにはいかなかった。

本気で風邪で休んでやろうと思ったが、昔から健康優良のわたしは風邪をひいたりしない。

ああ、わたしの人権ってどこに…。

「ほら、応援しないと旗本君が本気出さないから行くわよ」

アイツの応援なんかしたくもない。

でもクラスの視線が痛いので、精一杯の笑顔を貼り付けて声援を送る。

今行われているバスケの試合はうちのクラスが優勢だった。

正直、聡里が本気出したら勝負は見えている。

だからとんとん拍子に決勝戦だ。

「…：わたしは応援する必要ないじゃん…」

いっそのこと悔しいから負けて欲しい。

何て言ったらクラスの皆を敵に回す羽目になるから心でこっさり思う。

でも負けるよりは勝って欲しいというのも本音だ。

「ああっ！！」

よそ見をしていたら、同じクラスのチアをやってる女子達が悲鳴

を上げた。

その視線の先には聡里が居る。

「旗本君、大丈夫!？」

試合に出てる男子や応援している女子たちがうずくまる聡里の周りを囲む。

どうやら、相手のクラスに反則で攻撃を受けてしまったらしい。笑っているけど、顔を顰めてる。

わたしの場所から離れていたから遠くで眺めたただけだけど。

「…痛そう」

「そうね。でも続けるみたいよ?」

試合が再開された時のアイツの表情は真剣そのもので。誰も止めなかった。

… … … … …

結局試合は圧勝。

聡里と榊くんのコンビがかなり活躍してた。

喜ぶクラスの皆に揉みくちゃにされて、その中心で笑ってる。

わたしはその輪に入らなかった。

少し離れて、それを見てる。

「行かなくていいの?」

「…何でわたしが」

玲奈は苦笑気味に肩を竦めた。

…別に私はアイツの彼女でも何でもないし、周りには沢山女の子いるし、そもそも関係ないし!

「マイスイートハニー!俺の活躍は見てくれたかい!？」

うわ！いつの間に！？

取り巻いていた人たちから離れ、聡里は目の前に現れて抱きついてくる。

「聡里、あんた」

「君の応援のお陰で、勝てたんだ！君は僕の女神様さ！」

うわー、よくもまあペラペラとそんなにも言えたものね…。

わたしは聡里以外の誰にも聞こえないように声をひそめて言う。

「…あんた怪我してるでしょう？」

多分みんなに知られたくないから、わたしの傍にきた。

わたしなら誤魔化せるとでも思ったのだろうか。

聡里は一瞬息を呑んだかと思うと笑みを益々深めた。

「…何のことだい？」

「いいから行くよ。この際わたしが怪我をしたということにしてもいいから」

腕を引っ張り体育館からでる。

幸い誰にも見られてないし、聞かれていない。

遠目がちのクラスメート何となく不思議そうな表情をしているが、別に変わった組み合わせでもないから笑って見送る。

「大体、痛いなら正直に言いなさいよね！」

「ハニーに良いところ見せたかったんだよ」

はいはい、それだけ言えるなら元気ね。

わたしはわざと怪我をしているところを触れてやった。

3戦目、第三者視点で状況を見つめます。

私は、もし例えるならばクラスメイトA B C Dという配役のどれかだ。

つまり名前なんて必要のない背景のような存在である。

私が通う桜塚学園は中高大一環の教育が売りだ。

学力は上位に入るけれど厳しい進学校ではなく自由な校風が人気の一つ。

今回は総生徒数がとてつもないこの学園で私がイケメンに遭遇した話をしよう。

「旗本聡里です。第一中学から来ました」

変声期を終えた後の声にしても高すぎず低すぎないその声色は心地良い。

お決まりの入学後の自己紹介で正直あまり興味がなかったが、その声に顔を上げた。

目の前には、ありきたりな四文字熟語が似合いそうな文字通りイケメンがいた。

そういえばこのイケメン、入学式の代表挨拶をしていたではないか。

ここにいるということは同じクラスになったのだろう。

女子は先程から言葉もなく見とれている。

その目の形はハートだ。いや実際ハートの形ではないけどね。

そんな中視界の端にこのイケメンを見とれているどころか、親の敵のように恨めしい顔をしている女子が入った。

不可解にも思ったがそれよりもイケメンから目が離せないので視線はすぐ戻る。

「趣味は読書と瑞希鑑賞です」

自己紹介が続くイケメンの流れるような言葉に誰もが耳を疑った。
「みずき……？ 映画鑑賞などと聞き間違えをしたのだろうか。
そうだ、きつとそうに違いない。」

「あ、瑞希というのはミスウィートハニーのことです」

……どうやら聞き間違いではないようだ。

誰もが言葉を無くして固まる中、視界の端の例の女子が机に恥ずかしそうに突っ伏した。

何となく、彼女が「瑞希」だろうと予想。

「あと瑞希が可愛いからって好きになっちゃ駄目だからな！」

にこやかに微笑むイケメンを、私は初めて残念な気持ちで見つめた。

神様はこのイケメンに沢山の才を授ける代わりにこのような人格にしたのだろうか。

いやはや世の中とはうまく回っているものだ。

「ちなみに俺と瑞希は生まれたときからの恋人同士で……」

「勝手なこと言うな！ この変態！」

とうとう耐えきれなくなったのか、彼女は机を思いっきり叩いて立ち上がる。

怒りに満ちた彼女がイケメンはニヤリと笑った。…そう…確かに笑ったのを見てしまったのだ。

「そんなに照れることはないだろ、ハニー」

「だーれーがーっいつハニーになった!？」

「……忘れたのか、俺達は結婚を誓い合ったじゃないか!？」

「幼稚園の時の話をいつまでも引き合いに出すなあ!」

真っ赤になって怒鳴る彼女に対して、イケメンは至って余裕。

……今までの発言は冗談なのか、本気なのか判断しにくい。

ああ、ついに彼女がイケメンの襟首を掴みギリギリと締め付けている。

にも関わらずイケメンは苦しそうな顔を見せず、それどころか光悦とした表情を見せた。

……正直、キモ……いやいや。

彼女と同じく感じたか、やはり彼女も顔をひきつらせながら手を離し距離を置いた。

うん、いい判断だと思う。

「そんなに離れることないだろう」

これまた何故か嬉しそうな表情でじりじりとイケメンは彼女を追い詰める。

イケメンなのに異様な姿に恐れをなしたのか男子一同は引き気味で、女子一同はこの一連のショックから立ち直れていない。

まあ私は今までに無かった展開なので楽しんでみているんだけど。今までも今も空気みたいな担任（24歳、独身男）は面白がっているのかニヤニヤしながら見守っている。

教職者として如何なものかと思うけど、この際置いておこう。

つまり彼女は孤立無援状態なのだ。

「……いい加減に席に着きなさい」

ため息混じりで第三者の声が入る。

声の方を見ると、これまたクール系美少女がいた。

イケメンとは違う系統だけど間違いない二人揃えば目の保養だな。

「玲奈っ!」

追い詰められていた彼女の方は天の助けと言わんばかりに感激した表情を見せたのに対し。

イケメンは一瞬冷めたような表情を見せた後困ったようにため息をついた。

「仕方がない。今日はここまでにする」

今日は？

いつもはもっとスゴいのか！？

奇しくもクラスの心が限りなく一つになった瞬間でもあった。

「でも俺の心はハニーに囚われたままだからな！」

「うるさい黙れ！」

イケメンの言葉に彼女は突っかかる。が美少女の一瞥に気まずそうに黙った。

さすがに空気を呼んだのか……いや面倒になったのか、担任が手を叩き次の自己紹介を促す。

ともあれ、この強烈な後に自己紹介をするのは不憫だと同情するが。

その後は言わずともかな。

私は所詮クラスメートA B C Dのどれか。

物語の端っここで物語の顛末を眺めている。

まあお陰で退屈することはなくなったけどね。

4戦目、消化不良気味に次戦持ち越しです。

ふふふ！

私はこみ上げてくる喜びを抑えきれない。

「…瑞希、気持ち悪い笑みをやめなさい」

いくら親友玲奈が気持ち悪いモノに対する冷たい視線でもわたしの心は浮き立っていた。

だって、何たって！

「文化祭まではあの変態に付き合わなくてもいいなんて…！」

話は、一昨日に遡る。

「ウチのクラスの文化祭出し物は劇になりました」

委員長がちよっと面倒くさそうに、黒板に決まっていることを箇条書きしていく。

わたしのクラスの委員長は女の子ながらにサバサバした人で、時々見かねてあの変態から助けてくれるいい人だ。

だからあのやる気のなさそうな担任に任命されても断れなかったのだろう…：クラスの行き先が不安で。

委員長のことを考えている内に、委員長は書き終わったのか手についてチョークを払う動作をしていた。

「この中から決めるのですが、先生から意見は……有るわけありま

せんか」

一応先生を見るけど、やる気がなさそう：じゃなく、面白そうにニヤニヤしているだけだ。

諦めたように一つため息を零す委員長、まあいつものやりとりなだけで。

「と言うわけで、金賞を取ったら担任が焼き肉おごってくれます！」突然の委員長の言葉に全員が息をのみ、一瞬の間の後歓喜した。基本的にはみんな仲がいいクラスなんだよね。

当の本人である担任は一瞬驚いたように委員長を見たが、にやりと笑った。

「だからお前ら絶対に金賞取れよ？」

担任からもオッケーサインが出た。

益々やる気になったのかクラスメートが挙手。

「ちなみに何の劇をやるんですか？」

委員長が改まうように咳を一つ。

皆が固唾を吞んで答えを待つと、委員長はにやっと笑って答えた。

「ずばりロミジュリです」

それは古からの悲劇のロマンス。邦題『ロミオとジュリエット』女子があつという間に落ち着かない様子で色めきたった。

……そりゃあ、ね。

ちらりと気付かれないように、隣の席を見る。

と、目が合って超笑顔でこちらに手を振っている。いや隣の席なだけで。

「珍しいわね」

前の席の玲奈が後ろを向く。

みんな興奮しているのか雑談が始まり全体的にざわざわしている。だからこうしていても咎める人はいない。

「めずらしい？」

「旗本君ってこういうの立候補しそうなのに。瑞希ヒロインで」最後の一言が余計だけど、確かに言い出しそうなのに何も言わない。

まあ、正直うちのクラスのロミオ役は既に決まっているようなものだけだ。

「だってこれ悲恋だろ？俺は瑞希を死なせたりしないし死なない。なんたって俺たちの愛は永遠だから！」

「誰が、俺『達』だって！？」

勝手に纏めるな！

すると聡里は演技っぽく悲しそうな表情をした。

そのわざとらしさにイラッとする！

「あーお取り込み中悪いんだけど」

パンパンと皆を落ち着かせるかのように委員長が手を叩く。

いっせいに教室がシーンと静まる。

「劇は投票制で金賞が決定するのでヒーローは目をひく人でなくてはなりません」

視線が、自然と一箇所に集まる。

…忘れかけていたけど誰もが目を留める美形がいるんだった。

「旗本聡里君、ロミオ役で決定」

委員長の采配は正しく、誰も異論を述べない。

わたしだってそう思う、どんなに中身がアレだとしても。

黙っていても黙っていなくとも人を惹きつける男だ。

「…まあ、いいけど」

さすがに空気を読んだのか。

特に反対することもなく頷いた。

頭の回転が早いはずの聡里にしては珍しく戸惑っているみたい。

「さて、肝心のジュリエット役ですが」

委員長と目が合い、わたしは咄嗟に勢いよく横にふった。

冗談じゃない！わたしのような平凡な顔がヒロインだなんて！！

「…ここは公平にアミダクジで決めますか」

紙に幾つも棒線を書いていく。

何人かは辞退しているけど、なぜかわたしは『不公平になるから』強制参加らしい。

当たりませんように、当たりませんように！！

……わたしの祈りは通じた！

話は冒頭に戻り、わたしは教室の端から中心で練習をしている役者群を見る。

聰里の隣に立っているのは、小柄で細い女子の成川りり子さん。

成川さんは学年でも守ってあげたいランキングにも上位ではいるような可憐な人。

お似合いで目の保養になるカップルだ。

練習中はお互いの息を合わせるためにずっと一緒に居る。

その為わたしにアイツが近寄ってくることはないし、むしろそんな暇もない。

何て楽なの！やはり喜びが溢れてきて笑いが止まらない。

「…それでいいの？」

見つめていたわたしに、呆れたように玲奈が言う。

いいって…一体何が？

玲奈の言葉にわたしは返さない。

……きつと返しちゃう駄目だ。

「……いいならいいけど」

ため息交じりの玲奈の方が向けず、ずっと役者群の方を向いていた。

すると目ざとく聡里はコチラに気付いて、気持ち悪いぐらいの笑顔で手を振ってくる。

とりあえず、そっぽは向いておいた。

4戦目、消化不良気味に次戦持ち越しです。(後書き)

お読み頂きましてありがとうございます。

変な終わり方でごめんなさい！

一応この話からちよつと続きます。

4. 5戦目、傍観者からの攻防戦勃発です。

「でも、まさか委員長がああ言うとは思ってみなかった」

今呼ばれている『委員長』とはモブキャラクター（背景の人物や群衆などの意味）に等しい私のことである。

勿論名前ではないが、クラスメートが付けてくれた愛称みたいなものだから特に否定はしない。

事実クラスの雑用……もとい委員長の任を請け負っている。

それもこれも、あのいい加減な担任（24歳、独身）のせいだ。

面倒くさがり屋の傍観者を自負している身としては腹立たしいが、それはまた別の話。

今は、ホームルームの『金賞を取ったら焼肉』の話だ。

「そう？ 皆のやる気に火をつけるべく、ここは先生に太っ腹になってもらわなければ」

それに実は知っている。

金賞をとったクラスには賞金、更に先生にも色々『特典』があるらしい。

「そういえば鈴原さんはこれでよかった？」

今話している相手、鈴原瑞希さんはきょとした目でこちらを見た。

旗本君と関わらなければとても素直で良い子だと知っただけで、少々自身関して疎いところがある。

学力での成績は優秀だから、それが彼女の人柄なんだろうと推察。「ジュリエット役譲っても良かったのかってことよ」

察してくれた周防玲奈さんが口を挟む。

周防さんの言葉で理解したのか、瞬時に冷めた表情を見せた。その冷めた表情はきつと私たちに対して、ではないだろう。

「委員長までそんなこと言うの？ 変態とわかってる相手のヒロイ

ン役なんて……」

想像しただけでも嫌なのか、彼女は悪寒が走ったように身を縮ませている。

こんなに拒否られているのかと、少々同情が湧きそうだ。

……いや、彼の自業自得なところもあるか。

「それに、このドレスが似合う人は他にもいるでしょ」

ちなみに私たちは衣装班である。先程から会話をしながらも針を縫う手は止めていない。

まあ私は委員長なので一応総括的な立場にいるが、一番大変である衣装班に主に所属している。

演技指導などの監督業は、全て演劇部員に任せた。

なぜ都合良くクラスに演劇部員がいるのかというのは、ご都合主義なのだからご容赦願いたい。

「ていうかドレス出来上がるのかな……」

ぽつりと弱音を言われ手元を見ると、ようやくドレスは形になってきている。

今は袖口にフリルをつけているところだ。しかしここからが難解でややこしく面倒くさい。

この衣装を着る予定の主演は、庇護欲のそそる笑顔で旗本君の隣にいる。

仕草やら言葉使いやら全てにおいて乙女全開だけど、悲しいぐらいに彼には伝わっていない。

気付いているのか気付いていないのか、彼は対人用の作り笑顔でかわしている。

「やっぱり、目の保養になるよね」

特に感情をのせずに、彼女は呟く。

確かに、相手役の成川りり子さんは可愛い。

二人が並ぶとまるでドラマに出てくるようなカップル。

でも気付いてないかな？彼の表情や仕草の端々を。

それに彼女も今どんな顔をしているのか、気付いていないでしょ

う。

同じ思いなのか、周防さんと一瞬目が合って同じく苦笑い。私なんぞより付き合いの長い周防さんは、どうやら黙っておくよなので私も黙っておこう。

「さ、これが終わったら8割方完成するから急ごう」

とりあえず、私には気を逸らすことぐらいしか出来ないだろう。

二人も気を取り直したかのように集中して手を動かした。

日が落ち暗くなり始めた頃、校内アナウンスが下校時間を知らせる。

それに促されてうちのクラスも解散となった。

私は委員長という任があるので、全員が教室をでたことを確認して施錠。

あとは担任のところに行って報告して鍵を渡せば、私も帰宅できる。

まったく、面倒なことだ。

「あれ、委員長まだ居たのか？」

窓を閉めていると、ひょっこり顔を出したのは担任。

職員室に行く手間が省けたと内心小さく喜ぶ。

「確認したら帰ります」

すると担任は返事も曖昧に、教壇に放置されている台本を開き読み始めた。

ちよつと、私は帰りたいんですが。

「なあ、あの二人ってどう思う？」

突然何を言い出すんだ、と思うが言葉は思いとどまった。

あの二人、とは恐らく私も思い浮かんだ二人で間違いないだろう。だからといって、担任の考えは読めない。そんな少ない言葉じゃ解らず聞きなおす。

「……どう、って何ですか？」

「くつつくかったこと」

……ちよつと意外だ。

やる気はなさそうだから無関心かと思えば。

いや、これは楽しんでいるな。

「さあ、どうでしょうね」

「俺はあの二人くつつくような気がする」

「……そうでしょうか」

そう簡単にいくだろうか。

彼女の方は勿論、彼の方も中々本心を見せていないようなところがある。

もしこのままだったら、間違いなくすれ違うだろう。

そうならないことを願うが。

「だったら賭けてみるか？」

「は？」

「今年中にくつついたら、来年もお前が委員長だからな」

二年生になればクラス替えがあるんですが。

ていうかこの担任、人を雑用係にする気満々だな。

しかも生徒を賭けの対象にするなんて……本当に教職者か。

一方で考える。文化祭がある今月は9月で、今年はあと3ヶ月とちよつと。

「……では来年は他の人でも探して置いてください」

正直難しいだろう、このままのペースでは。

私はにっこりと嫌味のつもりで笑顔を向けると、担任は益々楽しそうに笑顔を作った。

その笑顔、初めて見たときからイラツとくるのは秘めておこう。

まずはクラスで金賞をとることが目標。

賞金が出るといっても多少は自腹を切らねばならないだろう、決して少くないクラスメートの分を。

精々後悔すればいい。
私はささやかな復讐を心に誓った。

4. 5戦目、傍観者からの攻防戦勃発です。(後書き)

委員長視点でした。

横道にそれて申し訳ございません。

次は5戦目に戻ります。

5戦目、曖昧な駆け引きは謎を呼び込みました。

文化祭当日。

わたしは自分の格好を見下ろしてため息をついた。

ひらひらレースが重なったピンクドレス。

文化祭では色々な格好をしている人が多いけど、それでもやっぱりこれは目立つ。

「瑞希、ため息ばかりつかないで」

そういう玲奈だったため息をつきたい表情をしている。

玲奈はわたしのちよつと豪華なドレスとは違い、メイド服に近い。わたしと玲奈の服は劇のもので、つまりわたしたちは宣伝をかねて練り歩かなければいけない。

「……まさか自分が着ることになるなんて」

選ばれた理由は、要するにヒロイン役の成川さんと背格好が似ているから。

わたしの前に、同じ背格好の似たクラスメートが宣伝を行っているので断ることも出来ない。

「ていうかこんな格好見せられない!」

幸運なことに一番見られたくない相手であるアイツは、出演者同士でぎりぎりまで練習するそうだ。

だから写真を断固拒否さえすれば見られることはないはず。

「旗本君可哀想だよ、『旗本君は』完璧なんだけどね」

同じクラスメートの子は苦笑混じり。

聡里は頭が良さだけあって台詞は完璧だし、器用なのか才能なのか演技も文句なし。

問題は誰の目からも見てもヒロインにあるらしい。
でも何となくヒロイン役の成川さんの気持ちが分かるような気がする。

……だって常にアイツの隣に立つには、いつも求められるものが
大きすぎるから……。

「……瑞希？」

気付かない内にヒドい顔をしていたのか、心配そうに玲奈が見ている。

「何でもない。さあ早く行こっ！」

これが終われば本番までは自由だし、榊君には悪いけど玲奈と色々校内を周りたい。

榊君も出演者であるから本番まで解放されることは無いだろうし。
最初のシーンで使う目元を隠す仮面を付けて、にこやかに送り出すクラスメートに手を振りながら意気揚々と出発した。

仮面を付けて廊下を歩くと誰か分からないみたいでみんな視線を向けている。

それに対して笑顔を向けながらチラシを配ったり、看板を見せるのが仕事。

うん、中々に難しい！

救いなのは仮面を付けているので誰だけ解らない分、いろいろとふっきれる。

「……玲奈、大丈夫？」

こっそりと玲奈を伺うと、玲奈は強張ってはいるけど何とか口許は笑っている。

玲奈は人見知りが激しい分笑うのは苦手らしい。

それでも、この役をかって出てくれたのはわたしのせい。

それももうすぐ終わる……筈だったのに。

「うわ、すげえ服！」

ついうっかり忘れていたけど、玲奈はクール系美女だ。

しかも今仮面を付けて素顔を隠している分、ミステリアスが増しますます美人。

絡まれることなんて予想がついたのに！

声が出たのと同時に咄嗟に背を向けて、玲奈を先に行かせる。

それが氣にくわないのか、絡んできた他校の男子は近い方に居たわたしの腕を掴む。

「おいおい、無視するなよ」
「というか痛い！」

仮面の下から睨んでも、ニヤニヤ顔を崩さない。

向こうは4人だからあつと言う間に囲まれてしまう。

「……退いてください」

凜とした玲奈の声は迫力はあるけど、今は通用しない。

周りの生徒はざわついているのに、遠巻きで見つめているだけで口が挟めないみたいだ。

「いいじゃん、劇見に行くからちよっと付き合ってくれない？」

「別に来なくていいから離してください」

逃がさない為か、加減のない力は痛い。

やはり男女の差か、ふりほどけそうにもない。

「離してっ！」

「その手を離してもらおうか」

突然被った言葉にわたしの声は掻き消える。

その誰よりも聞き心地の良い声を聞いた瞬間に……ほっとしてしまった。大変不覚だけど。

「さあ愛しの君、私の手をお取りください」

突然現れた人物に呆気にとられたのか、いつの間にかに腕から手は離されている。

……無理もないよね、ふりふり貴公子風の服装に蝶のモチーフの仮面を付けている姿の男が現れたのだから。

堂々としていて、しかし場にミスマツチ。

わたしもこんな蝶のモチーフの気持ち悪い仮面を付けた男の手を取るなんて……いやだっ!!

「な、何だよ」

気を取り直したのか無謀にも仮面の男に向かう。いくら及び腰だとしても。

それに対して仮面の奥で楽しそうに目が細められているのを、バツチリ見ちゃった……。

「さて、どうしようか？」

あっと言う間に似たようなヨーロッパ系の服装を着た集団が周りを囲む。間違いなく劇の出演者だ。

……アンタ、クラスメートを巻き込むなんて……ていうかいつの間にか居たの……。

同じく呆れて何も言えなくなっていると、ちゃっかり隣にきて手を取る。

しかもさり気なく腰にも手を回すなっ!と叫びたいのを流石に頑張って我慢する。

「それでは14時からの『ロミオとジュリエット』をお楽しみに」
中心の蝶の仮面の男、聡里は笑顔を振りまきながらそのまま場を立ち去る。勿論絡んできた他校男子は言葉もなく、その場に立ち竦んでいた。

そろそろと囲まれたままの移動なので、周囲も自然と道を空ける。視界の端で、玲奈も榊君の隣にいるのを確認すると安心した。

「……ちょっと、いい加減離れなさいよ！」

「嫌に決まってるだろ。10日ぶりの瑞希だぞ！」

がちりと腰を掴まれ、どうやら逃げ出せそうにない。

どこを触ってる！捕まれ、セクハラめっ！！

睨み付けるけど、どうやら聡里も今回は引く気はないみたいだ。

ていうか10日ぶりって数えてるの……どん引きだわ……。

「……そういえば練習はどうしたの？」

本番ぎりぎりまで練習するという話はどうしたんだろう？

わたしの言葉で周りを囲むクラスメートが何故か表情を引きつらせる中、聡里だけが笑顔だ。

……謎だ。なんか引くかかるけど。

「大丈夫。何とかなる」

「何とかって……」

「それより今は瑞希不足を補う方が大切だ！！」

がばっとついに抱きついてくる。もう離さないばかりの勢いだ。

このセクハラ変態！はーなーれーろーっ！！

……しかし悲しいかな、助けてくれるクラスメートは居なかった。

結果で言えば、うちのクラスは金賞だった。

それも当然の結果だろう。劇を見た女子も男子さえも感動の渦だったらしい。

らしい、というのは見ていないから。何だか見る気が起きなくて教室で待っていた。

謎のまま、結局一部の出演者達は聡里を戦々恐々と言わんばかりに遠慮している。

「みーずき？」

でも聡里はいつも通り何を考えているのか解らないへらへらした笑顔だから、何も気にすることも無いんだろう。

だってコイツは見た目も頭脳も良いくせに……変なことを言ったりし抱きついてきたりする変態なんだから。

「なんでもない」

そう？と首を傾げて笑っている。悔しいぐらいにいつもどおりだ。だからなんだとも言えるけど。悔しいから聞こえないように囁く。
「……今日は助けてくれてありがとう」

ん？と聡里はまた笑う。

聞こえているくせに、聞こえないふりはやっぱりズルイ。

6戦目、古典的パターンには慣れています。

文化祭も終わり、中間テストも近い今日この頃。

「……ちよっと」

「ん？」

「いつまでもくっついてるのよっ!？」

ぐぐぐっと全身を使って、抱きついていてる変態を押し出そうとするけどびくもしない。

べったりくっ付いて鬱陶しいわっ!はーなーれーろっ!!

「まあまあ、鈴原さん。我慢してやってよ」

取り成してくるのは何故かクラスメート男子。玲奈は勿論、榊君もなにも言わないのに。

榊君に「助けて」と視線を送っても、眉を下げて困ったような微笑だ。

……あれは、言外に「ごめんね」と突き放している。玲奈は関わるのさえ嫌みたいだし、本当に親友なのだろうか……。
って、そうじゃなくて。

「……どうして、聡里みたいな変態を庇うの？」
いつもは生暖かい目で見ていただけなのに。見てるなら助けてほしいのに。

しかも取り成す人、みんながみんな劇共演者ばかりだ。ここまできると文化祭の日何か合ったのかと疑う。

疑いのまなざしのわたしに、問われた男子はギクリと身体を強ばらせた。

「いや……そのっ……」

あからさまに焦ってしどろもどろ。視線を聡里に向けたかと思うと、その表情を青褪めさせたように見えた。

……いま、聡里はどんな表情をしているのだろう。後ろから抱きつかれているので見えないけど、見たいような見たくないような……。

うん、自分のために振り返るのは止めよう。心に固く誓う。

決心していたら聡里が益々ぎゅっとしてきて。ちよっとびくっとしてしまった。

「……瑞希いゝ」

「な、何よ」

「ちよっと胸育った？」

その瞬間場が凍ったのと同時に、わたしは聡里の顎下から拳を叩き込んだ。

「どこを触ってんだっ！この変態がっ！！！」

自分でいうのもあれだけど、今までで一番綺麗にキマった。お陰様で聡里はようやく離れ、床に尻餅ついている。

それなのに、聡里は痛そうな素振り一つ見せずに光悦と笑顔だ。

……マゾか、そっちの意味でも変態なのか……ひとまず本能的に後ずさりをして距離を取る。

「何で、さっきから引っ付いてくるのよ！」

文化祭が終わった翌日の一昨日から昨日といい今日までも！

昨日はまだよかった。

くっついても腕を回したりせず、ぴたっと文字通りくっついているだけだった。

……いや、よくよく考えても昨日の状態もアリエナイし。もしかして最近毒されてるの！？

新たに気付いた事実には、わたしは物凄く嫌そうな顔をしているだ

ろう。周りは啞然と、引き気味だ。

だけど知ったこっちゃない。助けてくれない時点で周りも同罪だ！

「あ、あの……鈴原さん、どこいくの？」

踵を返し教室を出て行こうとするわたしに、クラスメートは恐る恐ると聞いてくる。

睨むように視線を向けると口を噤んだ。……わたしってそんなに目つき悪いかな。

「……トイレ！」

この変態が絶対に来れないところ。むしろ入ってきたら、警察に突きだしてやる！

勿論誰も止めることなく、見送るだけだ。

「……………ちよつと、いい？」

帰りたくないけど潔くトイレから出て教室に戻ろうとする途中、道を阻まれた。

そう言いたくなるでしょ、廊下に3人が並び立つと。他の人からも通行の邪魔じゃないのかな。

「鈴原さんに話があるんだけど」

話を切り出したのは向かって右の女子。あまり顔に見覚えないから他のクラスかな？と考える。

左側も同じくだけど、真ん中には見覚えある。

「成川さん？」

うちのクラスのアイドル、成川りり子さんだ。

わたしと身長同じぐらいなのに色白でか弱い感じが可愛い女の子。と暢気に思っている場合じゃない。

……このピリピリとした空気になんとか察してしまう。わたしには話なんて無いけどそういう訳にはいかないよね……。

「いいよ、場所移す？」

面倒になって諦めたわたしに、3人が先導して歩き出す。素直に

わたしは後ろをついて行った。

この方向は特別教室があるところで、つまり人気の無いところ。その教室の一つに入ったら向き直った。

「話って……なに？」

大体予想つく。

さんざん慣れてしまった自分が悲しく、同時に元凶が憎い。

「あんた……聡里くんの弱みでも握ってるの？」

名前の知らない右側女子の言葉に、わたしは目を丸くしているだろう。

弱み……そんなの握った暁には、半径3メートル以内は絶対近寄らせないので……。

予想通り聡里の話題、忘れがちだけどアイツ顔は良いんだ。

「大体りり子の方が可愛いのにどうしてこんな子が構われているの？」

今度は左側女子。そんなことわたしが聞きたい。

成川さんは相変わらず可愛い顔を歪めてこっちを睨んでいる。

正直ため息尽きたい。さっさと教室帰りたいのに。

「成川さんが可愛いのは確かだけど、どうして成川さん本人が言わないの？」

そもそもわたしに言うこと自体間違っているということに気付いていない。

だって、そうでしょう？ わたしがいつ喜んでいたのって。そう見えているとしたら……最悪。

それでもわたしに一番文句が言いたいののは、成川さんのはずだ。でも成川さんは何も言わない。

「わたしが気に食わないんだよね。分かるよ、その気持ち」

理解は出来ない、と心の中で呟く。『分かる』と『解る』は違う。

わたしの言葉と平然な態度に、左右の女子たちは呆気を取られ成川さんは益々顔を歪ませた。

「……あんたがいるから、りり子のことを見てもらえないの！ りり

子の方が絶対に可愛いのに！」

成川さんは自分のことを名前呼びらしい。普通だったらアレだけど、成川さんなら許せるなあ。

今にも泣きそうな成川さんを眺めながらそんなことを考える。ぼんやりしていたら、成川さんが手を振り上げた。

「あんたなんていなくなったらいいのに！」

今まで何度その言葉を言われただろう。

……そんなこと、一番わたしが解ってるのに。

手が振り下ろされるのを見て咄嗟に目を瞑り痛みに耐える。パントと乾いた音がしたけど……痛くない。

肩に手が置かれたのに気付いて目を開けた。成川さんとわたしの間にいつの間にかに、いた。

「……さ、聡里君……」

「成川さん、さあ」

叩かれた頬を気にせず、聡里は成川さんと向き合う。

今は後姿しか見えないけど、声からしてこれは……知らず知らず冷や汗が出た。

「俺は別に、いい。皆が望むならいくらでも優しくしてあげるよ……上辺だけど」

どこか愉快げで笑っているようなのに、こっちはワラエナイ。

こんな綺麗な顔の男に、微笑まれながら残酷な言葉を囁かれるなんて。

「でも俺の瑞希に手を出すなら……赦さない」

いつものあの変態っぷりはどこにいったんだろうか。と思えるぐらいに真剣な声。

ついに成川さんがぼろりとその大きな瞳から涙を零した。

次々と溢れる涙を手で隠しながら、教室を急いで出て行く。左右

にいた女子はあまりのことに茫然としていたが、成川さんが出て行ったので追いかけるように後にした。

残されたのは当然ながら、わたしと聡里。人気がないので途端に静かになった、かと思えば。

「瑞希！大丈夫か！？」

「誰かさんが庇ってくれたお陰で……ていうか、あんたのモノになった憶えはない！」

思い出してイラッときて蹴ろうとしたけど、簡単に避けられた。

避けられたので、わたしはすぐに聡里と距離を置く。また抱きつかれでもしたら堪ったもんじゃない。

じりじりと間を詰めようとしたけど、結局聡里は近寄るのを諦めたのか近くの机に凭れ掛かってこちらを見る。

その表情は先程の微笑に似ている気がする、あの心底キレているような。

だから何だって言うのって感じだけど。

「……瑞希、避ける気なかっただろ」

避ける気、とは成川さんのことだろう。

それはそうだ、運動神経悪いし。というより、いつの間にか居て尚且つ庇った聡里が驚きだ。

前から完璧だとは思っていたが、超人か……。

「それが何？」

「……別に」

きっぱりとしたわたしの答えに、何も言えなくなった聡里。それを見て内心ほくそえむ。

わざと聞きかえした。聡里が強く言えないのを知っているから。それに何だかんだと幼馴染だから、聡里は『身内』には甘い。

対外的な優しさに騙されがちだけど、一度身内を害せば容赦ないのだ。……だったら最初から優しくしなければいいのに。

「本性格悪いよね、聡里って」

まあ、わたしが言えた義理じゃないけどね。

聡里は苦笑を返すばかりだった。……どうやら自覚はあるらしい。

6戦目、古典的パターンには慣れています。(後書き)

お読み頂きありがとうございます。

ヒロインがライバルに校舎の裏でめられるのはお約束ですよね！
という感じのタイトルです。

解りにくくてすみません……。

閑話休題、たまには仲良く帰りましょう。(前書き)

本筋に関係のない話です。

続き更新できずに申し訳ございません！

何気ない日のお話です。

閑話休題、たまには仲良く帰りましょう。

「……旧校舎、があるだろうか？」

桜塚学園は中高一環の学びを売りにしているだけあって、その敷地面積はかなり広い。

さすがに大学は分校があるが、中高は近いところに校舎がある。そして何故か中高の間には忘れられた旧校舎が存在するのだ。

「昔、ピアノが好きな女生徒がいた。彼女はよく旧校舎の音楽室でピアノを弾いていた……雷の鳴る雨の日、事故でなくなるまでは」その時、ピカッと雷が光る。

確か今日の天候は雷雨だとニュースで言っていたから、ついに降り出したのだろう。

「彼女はその日も新しい曲を練習してて、事故にあった日忘れた楽譜を取りに戻る途中だった……心残りだったんだろうね」

また雷が鳴る。

電気を消した教室は雨のせいかな、まだ日が落ちてないはずの時間なのに薄暗い。

「未だにこんな雨の日になると探しているらしい……ひたっひたっ」と足音を響かせながら『私の楽譜を知らない？』と追いかけられるって……」

「……ええっ！」

語り手の言い知れぬ恐怖を煽る微笑に背筋に嫌な汗が流れる。

ついにわたしは隣にいた玲奈の腕を片手でそっと掴む。玲奈もその手を握ってくれた。

「楽譜を持っていないとその代わりに……事故で失った綺麗な手を

持って行かれるんだっ！」

語り手のフクちゃんが突然わたしの手を掴む。と同時に声にならない悲鳴をあげながらわたしは腰が抜けそうになった。

次の瞬間ぱっと教室の電灯がつけられる。

「みんな何やってるの？」

教室出入り口の所を見ると問いかけた榊君と聡里が不思議そうにこちらを見ていた。

び、びっくりした！

「みんなで暇つぶしに怪談話をしていたんだよ……怖かった？」

わたしは主に聞いてるだけでしたが。ていうか怖がっているの、私だけ？

聡里は何かを発見すると、徒歩とは思えない早さで近寄った。その動く早さ、気持ち悪い……。

そして手をあげ、フクちゃんと繋がれたままの手をチョップ。

「痛っ！」

主に叩かれたのはフクちゃんなので、わたしは痛くない。

けど突然何するのよ！

「俺の瑞希に何触ってるんだ！」

「だれがアンタのだ！」

フクちゃんはちょっと困ったように笑っている。

本当に副委員長のフクちゃんは良い人だ。因みにフクちゃんとは名字からのあだ名で、いつも人の良い笑みを浮かべている男の子だからよく合ってると思う

「鈴原さん、突然握っちゃってごめんね。一番良い反応していたからさ」

他にも女子は玲奈と委員長がいたけど、どうやら一番怖がっていたのはわたしみたいだ……。

だって話自体はありそうな怪談話だけど、語り手のフクちゃんの

表情とか仕草とかが恐怖を煽るから。

「瑞希！怖かっただろ、俺に抱きついても良いぞ！」

ってもう抱きついてるし、そもそも抱きついてくるな！

「離れてよ！それとフクちゃんは何も悪くないから謝りなさいよね！」

全力で腕で抵抗するけど、びくもしない。

離れろー！と、抵抗が行われている中聡里はまたフクちゃんに向き合った。

「……ごめん、悪かった」

「いいよ、気にしないで。俺もわざとだったから」

「へえ……」

へっ？

ずっと後ろから抱きつかれているから聡里の表情は見れないけど、何だかぞくつとした。

前にいるフクちゃんはニコニコ笑顔のままだから気のせい……だよね？

冷や汗が流れる中、フクちゃんは耐えきれない様子で吹き出し笑う。

「冗談だよ。聡里でもそんな顔、するんだね」

可笑しそうに笑うフクちゃん。

気になって身をよじり聡里の表情を見ると、いつも通りの笑顔だ。

「まあな。フク、後で覚えてろよ」

「っというか、放してよっ！」

一瞬の隙をねらい、聡里を思いっきり押しして脱出。

名残惜しそうにしていたけど、そんなのは知らない。

「俺の瑞希はつれないな……まあそんなところも可愛いけど！」

何照れたように頬を赤くしているんだ。

可愛らしく頬に手を当てていても、正直見た目にギャップありすぎて気持ち悪いとは思えない。

「ていうか、そもそもアンタを待っていから聞くはめになったんだ

から！」

そもそも暇つぶしにってことで話を聞いた。

聡里さえ待たなければ怖い思いはしなかった！ってちょっと見当外れかな……いやそんなこともないか。

「俺のことを待っていてくれたのか！」

「何感激してんのよ。聡里のお母さんからメールがあつたからに決まってるでしょ！」

わたしの言葉に聡里は自分の鞆の中を探る。

そういえばいつもメールを見ないって、聡里のお母さん言ってたっけ。

そのくせ、いつもメールすると返信早いのが謎だ……何か電波を察知することができののだろうか。

「今日は瑞希の家か」

メールを見た聡里が納得したように呟く。

うちと聡里の家は仲が良くて、夕食を一緒にする。

まあ別に一緒に帰る必要なんてないんだけど、おばさんが一緒に帰ってきてってメールするから待った。

聡里のお母さんって聡里を産んだだけあって可愛い系の美人なんだけど、笑顔のゴリ押しという隠れ技を持ってるんだよね……。

あの技に勝てるのは、私の母ぐらいしかないのだ。

「んじゃ帰るか」

聡里の言葉に、みんなもそれぞれ帰り支度を始める。

玲奈は榊君と帰るみたいだし委員長とフクちゃんは職員室に寄るって言うから、みんなに別れを告げて聡里と並んで教室を出た。

放課後だからか、廊下の明かりは落とされている。

外は雨が降っててやや暗いから、廊下も暗い。

「みずきー？」

「なに……」

「いや、なにも」

……何よ、そのキモチワルイ笑みは。

それにしても、いつもなら日が射して暖かい廊下も今日は気味が悪い……やっぱりあんな話を聞くんじゃないかった。

更にまだ雷もなってるし……最悪だ。

「瑞希」

「な、なに？」

ピカッと光たびに内心ビクッとしてしまうけど、聡里に知られるわけにはいかない。

コイツのことだから、嫌な笑みを浮かべて更に怖がらせそうだし。

「いや、ほら」

いやほらって言われても……差し出された手をじっと見つめる。聡里にからかいの色は見えない、ということはこの手はもしかして。

啞然としていると、聡里のほうからわたしの手を取って握り締めた。

「早く帰ろう」

そのままぐいっと引っ張って廊下を進む。
結構引きずられてるんですけど！

「ちょ、ちょっと！」

「大丈夫、誰も居ないって」

……そういう意味でもないんだけど。

まあ、いいか。と珍しく聡里の背中を見ているとそう思えてきた。
雷はまだ鳴っているけど、ビクッとはしなくなっただけ。

だけど、お礼は言わない。

学校の玄関でわたしの手を頬擦りしてきた聡里は、やっぱり変態だ！

7 戦目、かなしい夢は続きません。

『ねえ、瑞希。私ね、旗本君のことが好きなの』
突然の告白だった。

中学校に入ってから仲良しの、クラスメートの女の子。
その時、どうしてわたしにそんなことを言ってくるのか解らなかつた。

その子は、可愛い子だった。

おしゃれにもいち早く目覚めていて、だけど素直で甘え上手な可愛い子。

あの時、わたしは何て答えただろう？

『ねえねえ、瑞希！私と旗本君が付き合ったらどうする？』
別にいいんじゃないの。

相変わらずへらへらしてて、つかみ所のないあんな奴。

確かに顔はいい方だと思うし、頭だっていいよね。

でもそれにマイナスがくるぐらい変な奴じゃない！

数日後二人が寄り添うように歩いているのを見つけて、わたしの世界はひっくり返った。

「……雨、だ」

懐かしいような、難しいような夢を見た気がする。

頭がいたいの、雨が降っているからかな。
外の音は静かで、その静かさがわたしを夢へと誘う。
……夢の続きは見たくないのに。

『ウソツキ!』

ある日、あの子はとても怒っていた。
怒っているのにとっても泣き出しそうな顔をしていて、わたしはとても困惑した。

『ど、どうしたの?』

『どうしたの、じゃないわよ! ウソツキ、そうやって馬鹿にして満足なの!?』

何のことか、さっぱり解らなかった。

顔に出ていたのか、あの子は苛立って益々睨みつけている。
可愛かったあの子が、まるで般若みたいだ。

『聡里君のこと、そんなに独り占めしたいの!?』

『聡里? どうして、あいつが……』

嫌な予感がして、ずっと頭の中で警報がなっているようで痛い。
どうして、どうしてわたしが関係するの。

どうしてこんなにも不安なのに、わたしは。

『アンタなんかなくなっちゃえばいいのに!!』

……場所が悪かった。

あの子はただちよつと肩を押したただけなのに、わたしの後ろは階段だったから。

本当に世界が反転して、気付いたら病院のベットの上だった。痛いけど、これは自業自得だ。

だってあの時、わたしは……。

こんな思いは、もう何もかも蓋をしてなかったことにしよう。そしたらもう誰も傷つかない……わたしも含めて。

それなのに、わたしの取り囲む世界も変わった。

まずなにより聡里が『変わった』

本心はもっと隠すようにして、どこか壊れたようにテンションが高くなった。

それを見るたびに、わたしの『罪』が見せ付けられているようで。わたしは、聡里に向き合えないし受け入れることもできない。

「……いやな夢」

カーテンで覆われている窓の外は真っ暗で、すでに雨も止んでい
るみたい。

その時微かにだけど、こつと窓を叩く音がした。

まさか変質者でもいるのだろうか、恐る恐るカーテンを開ける。

「お、気付いてくれた？」

「……聡里」

まあ、ある意味変質者の聡里が何故かわたしの部屋のベランダに

いた。

そりゃマンション隣だけど、壁を乗り越えていたのか……間違いなく不法侵入なんだけど。

いつも通りへらへら笑って、今日は特に見ていてイライラする。窓を開けて、聡里を睨む。

「何よ」

「いや、突然ハニーに会いたかったのさ！」

私は全く会いたくなかった。

だから避けたいたし、高校も聡里とは違うところを受けた。

聡里には他の進学校から推薦があったし、そっちの方が今のところより数倍もレベルは高い。

多少言動が可笑しくても、秀才で先生からの期待も一身に受けている聡里がそこを受けないはずがなかった。

だからわたしは別のところを受けて、結果受かった。

「……何、馬鹿なこと言ってるの？」

でも、あいつは何故かいた。

同じ学校の制服を纏って、不遜に笑っていた。

「何しに来たのよ？」

「だから、瑞希に会いに来たんだってば」

「あ、そう。暇だったのね」

易々とそう簡単に嘘には騙されない。

だってこいつは、わたしのことを本当はこれぼっちも思っていない。

聡里がおかしくなって、すぐに気付いた。周りの空気を読んで、したたかに生きていることを。

「生憎だけど私は忙しいの」

「今まで寝てたのに？」

な、何で知ってるの？

凶星を言い当てられて、一步後ろに下がる。

カーテンで締め切っているから中の様子は解るわけがないのに、

まさか盗撮か!?

「そりゃ、愛してるハニーのことなら何でも分かりますよ?」

にやにやと憎たらしく笑う。

すぐくそれが爛に触るけど、何となく言い返す気力がなかった。

とりあえず盗撮疑惑は、幼馴染という最後の良心を信じよう……。

「で? 本当に何の用、なの」

「つき」

え、と聡里を見ると空を指差していた。

さらにその先には、まばらに瞬く星と、ただ一つ煌々と光る満月。

いつの間にかに、雨は上がって晴れていたみたいだ。

「…っ、き?」

「そう、綺麗な月だったから瑞希に教えようと思って」

ぼんやりと、見上げる。

聡里も、もう同じように月を見ている。

どうして、こいつはわたしにそんなことを教えようと思ったのだろうか。

本心を問おうとして、やっぱり止めた。

月が綺麗だから、何だかどうでもよくなったのかも。

……そういえば、もう頭が痛くなくなっていた。

7 戦目、かなしい夢は続きません。（後書き）

遅くなってしまう大変申し訳ございません。

久々の更新なのにテンションが上げられず、シリアス調になってしまいました。

そろそろラストに向けて話が進むと思います。

長くなってしまうのですが、お付き合い頂けますと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196n/>

わたしとアイツの10の戦。

2010年12月23日01時55分発行